# 魔法少女育成計画 Star Guardians

エクラ=レイ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界での守護輝士「斬剣」彼はオメガでの諸々の出来事が終わったあとつかの間の平穏を過ごしていた。その時、守護輝士直属のオペレーターシエラから地球でダーカー因子に似た反応が検出されたことを伝えられる。場所はＮ市、その街は魔法少女の噂が絶えない街であった。

ＥＰ５後すぐに終の女神が襲撃してこなかった世界線…

# 目　次

はじめましてから始まる育成計画
第一話　魔法少女 ―― 1
第二話　邂逅 ―― 4
第三話　出撃 ―― 8

# はじめましてから始まる育成計画

## 第一話　魔法少女

　アークス…宇宙を脅かす存在であるダーカー及びダークファルスの殲滅や種の保存を目的とした、オラクル船団内の組織。その中のアークスシップの一隻に彼は居た。

「ペルソナとかの強襲はあるといってもこう大きな出来事がないと暇だな…」

　アークス内の特殊な役職守護輝士、その二人のうちの一人、名を斬剣と言う。彼は今、オメガでの一連の騒動を終えダークファルスの襲撃はあるにせよある程度平和になった世界で、次の仕事へ向け体を休めていた。

「ま、アークスが暇になるってことはそれなりに今は平和ってことだ。いい事いい事…」

　だが現実は甘くない、マイルームのバルコニーのロングチェアでくつろいでいると守護輝士直属のオペレーターシエラからインカムへ通信が入った。

「斬剣さん地球のことで少し気になることがあるので艦橋へ来てください」

「なんだ?また風呂でも覗いてんのか?」

「違いますっ!」

　斬剣が冗談でシエラをいじるとシエラは怒った。どうやら真剣な話らしい。

「分かった分かった、すぐに行く」

　怒ったシエラをなだめると斬剣は事の詳細を聞くため艦橋へ走った。

　こうもトラブルに巻き込まれるのは守護輝士が故なのだろうか……。

～A・P　242年2月10日　アークスシップ　艦橋～

「来たぞシエラ、それで？詳細を教えてくれ」
「はい、結論から言うとダーカー因子のような反応が地球で検出されました。それも少量ではなくある程度の量が」
「〝ような〟ってなんだ？ダーカー因子じゃないのか？」
「はい、大部分の構成はダーカー因子と同じなんですが…微妙に違うところがあるというか……」
　シエラの歯切れが悪い、それほどに異常なことなのだろうか？という疑問を頭の隅に思っていると、シエラの隣に立っていたシャオが口を開いた。
「少なくとも言えることはダーカー因子が何らかの原因で変異したということだね。そして何故かそれは地球にある」
「つまりそれが何か、なぜ地球にあるのか調べてこいってことだな？シャオ」
「そういう事になるね。それともう一つこれを見てほしい」
　シャオはそう言うと一つの写真が写ったタブを大きくモニターに映した。その画面には竜騎士のような少女がトラックを受け止めている様子や、魔女のような少女が車の運転手に注意している様子など、他にも犬のような少女、二人組の天使などが映っていた。
「なんだこれ、コスプレイベントかなんかか？」
　どう見てもコスプレにしか見えない。これがオラクルの市街地やアークスロビーで撮られた写真ならまだあり得ただろう。だがこれはどう見ても地球で撮られた写真だ。周りの景色でわかる。
「ダーカー因子のような反応が検出された場所では魔法少女が人助けをしているっていう噂が流れているらしいんだ。僕は彼女たちのことを本当の魔法少女だと思っている」
「はぁ？エーテル能力者じゃなくてか？」
　斬剣はこの少女たちをエーテルの能力者だと思っていた。だがシャオの口ぶりではエーテル能力者では無いように聞こえる。
「はい、この人達からはエーテルともフォトンとも違う…でも同質の力が検出されました」

シエラがモニターにグラフを映し出す。どうやらフォトンとエーテル、そして魔法少女の力を比べたグラフのようだ。このグラフから魔法少女の力はエーテルというよりもフォトンに近い力ということがわかる。

ダーカー因子が変異したと思われるものが出たと思ったら今度はエーテルともフォトンとも違うけれども同質の物と来たか、もう良く分からなくなってきた。

「斬剣、君にはこの魔法少女についても調べてきてほしい場所は日本のN市だ」

「わかった、ここで話していても分からなくなってくるだけだしな…シエラ、キャンプシップを手配してくれ。すぐに出る」

「分かりました。すぐに手配しますね」

「あぁ、じゃあ行ってくる！」

艦橋を後にし、ゲートエリアのスペースゲートからキャンプシップへ飛び乗る。

「行き先は惑星地球、到着座標は…これでいいか」

音声入力で行き先を指定そしてシャオから聞いた座標を入力する。あとはマニュアルモードに変えない限りオートで指定した地点まで行ってくれる。俺は持ち物の整理などをしながら到着まで暇を潰した。

# 第二話　邂逅

”魔法少女育成計画”それは今巷で話題のスマホゲームである。ゲームは完全無料、課金などは一切発生しない。それでいて、著名イラストレーターによって描かれた美麗なカードや数々のキャラクタータイプに沢山のアクセサリーアイテム、その組み合わせ、キャラクタークリエイトの自由度は今、全世界で流行しているファンタシースターオンライン2にも匹敵するだろう。そしてこのゲームには奇妙な噂があった。

数万人に一人魔法少女になれる

という噂だ。

今、選ばれた15人（正確にはあと一人いるが）はこのゲームのマスコットキャラクターでもある電子妖精のファヴからとんでもないことを聞かされていた。

「魔法少女の資格を奪われた人は死んじゃうぽん」

その通達がされたのは魔法少女ねむりん、三条合歓が死亡したあとのことであった。

少女たちは知らないうちに命がけのデスゲームに足を踏み入れていたのだった。

「ラ・ピュセルは怖いとか思ったりしないの？」

「スノーホワイトは怖いのか？」

その通達を聞いた二人の魔法少女、スノーホワイトとラ・ピュセルは生き残るためマジカルキャンディ集めに前以上の力を入れていた。夜も更け、そろそろ帰路につかなければならないような時間になるまで二人は話していた。不安を払拭するためだ。

「そりゃ怖いよ、誰かが死んだり自分が死んだりそんなの嫌だよ…」

「そうだよな、僕だって怖い。怖くないわけないよな」

ラ・ピュセルの表情が引き締まる。スノーホワイトは気圧され反射的に離れようとするが、ラ・ピュセルはスノーホワイトの手に自分の手を添え、スノーホワイトは払うこともできず息を呑んだ。
「でもさ、怖いからって何もしなければ次に脱落するのは僕らだ。そんなの嫌だろ？だったらさ、二人で頑張ろう？」
ラ・ピュセルの顔は自分が憧れていた、魔法少女と何ら変わらない決意を持った顔だった。
「そうちゃん…」
涙を流すスノーホワイトにラ・ピュセルは寄り添い涙を拭いた――
その時だった。

その時だった。
「な、なんだ…？」
二人の周りの地面が黒く光り下から湧き出るように何かが現れた。それは二人もよく見たことがある魔法少女育成計画の敵キャラの悪魔であった。
「ど、どういうこと…!?」
突然の出来事に二人は困惑した。今までこんなものが現れたということを二人は聞いたことがない。
「…あちらは敵意むき出しのようだね……やるしかない」
ラ・ピュセルはそう言うと剣を取り出し、悪魔へと向けた。
剣を向けるのに反応したのか悪魔はこちらへ攻撃を開始した。

「ぐっ…このままじゃ…」
「まずいよ…ラ・ピュセル……」
戦況はあまり良いとは言えなかった。ラ・ピュセルの剣は辛うじて悪魔に効くものの、スノーホワイトには武器も何もない。肉弾戦で戦えるような相手ではなかった。そもそもスノーホワイトは魔法少女になったばかり。ラ・ピュセルもそこまでの戦闘経験は無かった。見様見真似で剣を振るったところで大したダメージにならないことは

分かりきったことだった。
「ぐ……っ！」
悪魔の攻撃が激しくなる。何体かは倒したがそれでも湧いてくる悪魔との戦いで既に二人の体も精神もボロボロになってしまっていた。
万事休すかと思われたその時、ラ・ピュセルは空に一筋の光を見た。
「っ……らァァっ！」
その光が人だと分かるのに3秒もかからなかった。空から落ちてきた人は落下の衝撃のみで周囲にいた悪魔をすべて吹き飛ばした。
「な、なにが……？」
二人の魔法少女は一瞬何が起きたのか分からなかった。
「いっ…ててて……おいシエラ！テレプール故障してんじゃねぇか！」
『知りませんよ！そのキャンプシップ選んだのはあなたですよね!?』
「なんなんだ……？」
魔法少女の二人からしたら異様なものでしかなかった。突然空から落ちてきて自分たちがボロボロになるまで戦っても倒せなかった敵を一撃ですべて片付けたのだ。無理もない。
「いいから戻ったら修理出しとけよ…いてぇ…」
斬剣は服についた砂を払うと二人の方に向き直った。
「大丈夫だったか？」
「あ…はい、ありがとうございました。」
スノーホワイトは礼を言ったがラ・ピュセルは斬剣に剣を向けた。
「ラ・ピュセル!?」
「いきなり空から降ってきて、魔法少女でも苦戦した相手を一撃で倒すやつを警戒しないほうがおかしいだろう？」
そう言うとラ・ピュセルは斬剣を睨みつける。それを見た斬剣は”おっと”という表情になり武装を解除して手を上げた。
「そりゃあそうだよな。まぁ、敵意は無いから安心してくれ。無理に警戒を解けとも言わん」
それを見たラ・ピュセルは少し考えたあと剣を下ろした。

「……わかった…少なくとも貴方は悪い人では無さそうだ」
「そう言ってもらえると助かる」
斬剣は手を下ろしこう続けた。
「取り敢えず、君たちが魔法少女で間違いない？」
二人の顔が驚いた顔になる。普通ならわからないはずだからだ。
「なぜそのことを…？」
ラ・ピュセルの殆ど解かれていた警戒の色が強くなる。
「君が言ってただろ竜騎士君」
「あ……」
張り詰めた空気が一気に元に戻った。

「聞きたいことがある、あいつらは何者だ？」
二人は困った。悪魔を見るのも交戦するのも初めてだったから無理もない。その様子を見た斬剣はこう言った。
「少しでも、何でもいいんだ知っていることがあったら教えてくれ」
斬剣からするとダーカー因子が関わっている可能性がある。だから少しでも情報が欲しかった。
無言の時間が続き少し経ったときスノーホワイトが口を開いた。
「あの悪魔は魔法少女育成計画というゲームの敵キャラです、遭遇したのは初めてだから何なのかはわからないけど…それだけはわかります。」
「ありがとう、助かる」
『斬剣さんさっきのエネミーの解析をするので戻ってきてください』
「了解した、君達にはまた会うことになるだろうラ・ピュセルと…」
「スノーホワイトです」
「スノーホワイトかじゃあな、情報提供助かった。おっと名前を行ってなかったな。俺の名は斬剣だ。名字は無い」
そう言うと斬剣は消えてしまった。
「何だったんだろう…」
嵐のように過ぎ去って行った斬剣にそう思いながら二人は帰路についた。

# 第三話　出撃

～A・P　２４２年２月１１日　アークスシップ艦橋～

魔法少女達と邂逅し、アークスシップへ戻ってきた斬剣。今、彼は魔法少女達が”悪魔”と呼んでいたエネミーの解析が終わるのを待っていた。

「解析完了しました」

前面のモニターに多量の情報が映し出される。シエラはその情報を瞬時に重要な順番に並び替え大きく映し出した。

「この感じはやっぱり…あの反応は黒いのからってことでいいな」

「はい、悪魔と呼ばれていたエネミーからダーカー因子に近いものが検出されたということで間違いなさそうです」

どうあってもダーカー因子が関係している可能性がある。アークスとして関わらないわけにはいかない。

「取り敢えずこちらでさらに解析は進めておく。斬剣、君には引き続き悪魔の調査と魔法少女との接触を続けてほしい。一度実際に会っている君ならわかっているだろう？彼女たちはただ人助けをしているってわけじゃ無いみたいだ」

「あぁ、あの警戒されたときの顔を見りゃわかる。少なくとも何かはあるだろうな……。分かった、準備したら出る。シエラ、キャンプシップの手配を」

「了解しました！」

斬剣が艦橋を出ようと背を向けたとき、シャオが付け足してこう言った。

「おっと、言い忘れるところだった。魔法少女達のデータもほしい。ま、戦闘するわけにもいかないから……。体に触れるか握手でもしてくれたらスキャンできるだろう。頼んだよ」

「分かった。どっかのタイミングで握手でもすりゃいいんだな」

そう言うと斬剣は艦橋を出て消耗品の補充をするためにショップエリアへ向かった。

～アークスシップ　ショップエリア～
「マグに食わせるモノメイトと……テレパイプ…スターにムーンアトマイザー……っとこんなもんかな？」
「あ、斬剣！何してるの？」
斬剣が買い物をしていると一人の少女が話しかけてきた。
「よぉマトイ、ちょっと地球に用事があってな。その準備だ」
彼女の名前はマトイ。斬剣と同じ守護輝士で特殊な任務やダークファルスとの戦闘を一緒にこなす事もしばしばある。
「地球に行くの？私もついて行っていいかな？」
今から地球へ任務に行くことを聞くとマトイはキラキラとした目で斬剣のことを見た。今から行くのは特殊な任務だが守護輝士であるマトイを連れて行くのは問題ない本来ならば……。
「いや、お前ペルソナ出てきてからやっと私の出番だとか言ってダーカー因子溜め込みすぎて出撃禁止令フィリアさんから出されてなかったっけ？」
「う……でも…」
「でもじゃねぇよ……またコールドスリープしたいのか？」
「はぁい…ごめんなさい…」
「分かればよろしい、じゃ行ってくる」
そう言い、行ってらっしゃいと手を振るマトイを背に斬剣はキャンプシップに乗り込み地球へと向かった。

～A．D　２０２９年２月１１日　惑星地球　Ｎ市～
「よっ…と」
Ｎ市へ降り立った斬剣はマップを確認する。マップには魔法少女の力の反応があるところに赤い印が表示されていた、その中でも沢山の反応が集まっている所があった。チームでも組んで活動している

のだろうか、なるべく多くの魔法少女と関わったほうが情報が集まると考えた斬剣はそこへ向かって走り出した。

---

一番最初に悪魔と対峙したスノーホワイトとラ・ピュセルがファヴへそのことを伝えてから少しして、緊急でチャットルームが開放され他の魔法少女にも情報が共有された。
「そういうことだから今は戦闘に自身がある人以外は悪魔を見つけたら逃げてほしいぽん。今、対処するための手段を準備しているぽん。それまでのお願いだぽん」
「悪魔が逃げたから外に出るときは気をつけてって、それじゃあ魔法少女を減らす件はどうなるのよ」
5人の魔法少女チームのリーダールーラが口を挟む。それに対しファヴはこう答えた。
「それは予定通り一週間でやるぽん。延期なんてしている暇はないぽん」
「……戦闘向きじゃない魔法の魔法少女が不利なんじゃないかしら」
「そうだそうだー!」
双子の魔法少女ミナエル、ユナエルが騒ぎ立てる。
「魔法少女に有利不利もないぽん。機転を利かせて状況に対応するのが魔法少女だぽん。ま、そういうことだからシーユーだぽん」
それに対しファヴは適当なことを言って流し消えてしまった。チャットルームが閉じられ不満そうなルーラ達。今後のことを相談するためリーダーであるルーラが口を開いた。
「はぁ……取り敢えず外に出てキャンディを集めるわよ」
「外には悪魔がいるかもしれないのに…?」
ルーラの隣に座っているスク水を着た魔法少女スイムスイムが口を挟む。それに便乗するかのように双子が騒ぎ始めた。
「うるさいっ!キャンディを稼がなかったら結局脱落して死んじゃうでしょ。そんなこともわからないのかこのバカ共!」

「で、でも…私達で戦える人居ないよ……？万が一悪魔に会っちゃったらどうするの…？」

ルーラに反論する犬耳魔法少女のたま、だがその意見もルーラには届かずキャンディを集めに外に出ることとなった。

彼女達の拠点とする寺の周りに不穏な影が現れたことを知らずに……。